

<論文>

歴史主義の射程 ——ナショナリズム研究における共同体分類——

坂田 敦志*

要旨

1980年代初頭、ベネディクト・アンダーソンとアーネスト・ゲルナーは、ネーションを近代の産物とみなし、その特異性を強調した。1980年代後半、アントニー・スミスは、ゲルナーらの主張を近代主義と名づけた上でその乗り越えを図り、ネーションの起源を前近代的共同体に求める歴史主義を提唱した。しかし、この立場がナショナリズム研究の主流となることはなかった。その後のナショナリズム研究の領野では、専ら近代主義の立場で研究が進められ、スミスの試みは黙殺されることとなる。

本論では、ジャック・デリダによる現前の形而上学批判を手がかりに、スミスが近代主義者によって設定されたネーションと前近代的共同体の関係をどのように書き換えたのか、そしてその書き換えがどのような可能性を有しているのか、以上2点を検討する作業を通じて、スミスの試みを捉えなおし、その射程を明らかにする。

キーワード： ナショナリズム研究、近代主義と歴史主義、近代と前近代、ネーションと原初的な村落、ネーションとエトニ、エクリチュールとパロール

目次

- I はじめに
- II スミスとゲルナー
 - 1 ゲルナーとナショナリズム
 - 2 スミスの挑戦
 - 3 ゲルナーの遺産
- III ネーションと原初的な村落
 - 1 アンダーソンと時代区分
 - 2 アンダーソンと共同体
- IV ナショナリズム研究の共同体観
 - 1 エクリチュールとパロールの物語
 - 2 スミスの可能性

* 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

V おわりに

I はじめに

東西冷戦の終結が予感され、殺戮の場が民族間に収斂していくかにみえた 1980 年代初頭、ナショナリズムをめぐる重要な著作が次々と発表された¹。なかでもベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』およびアーネスト・ゲルナーの『民族とナショナリズム』は、2001 年 9 月 11 日の米国同時多発テロを背景に、「野蛮」が他者へと臆面もなく割り振られる現代においてもなお、他者の汚名を晴らし、自らの野蛮性を説き続けるナショナリズム研究の起源にしてシンボルとでもいうべき位置を占めている。

アンダーソンおよびゲルナーは、上記 2 つの著作の中で、ネーションを近代の産物とみなし、その特異性を強調した[アンダーソン 1997; ゲルナー 2000]。1980 年代後半、アントニー・スミスは『ネーションとエスニシティ』の中で、彼らの主張を近代主義と名づけた上でその乗り越えを図り、ネーションの起源を前近代的共同体に求める歴史主義を提唱した[スミス 1999]。しかし、この立場がナショナリズム研究の主流となることは決してなかった。その後のナショナリズム研究の領野では、専ら近代主義の立場で研究が進められ、スミスの試みは黙殺されることとなる²。

本論では、ジャック・デリダによる現前の形而上学批判を手がかりに、スミスが近代主義者によって設定されたネーションと前近代的共同体の関係をどのように書き換えたのか、そしてその書き換えがどのような可能性を有しているのか、以上 2 点を検討する作業を通じて、スミスの試みを捉えなおし、その射程を明らかにする。

II スミスとゲルナー

先述したように、1980 年代後半、スミスは『ネーションとエスニシティ』の中で、アンダーソンやゲルナーの主張を近代主義と名づけ、その乗り越えを試みた。スミスはどのように近代主義を乗り越えようとしたのであろうか。果たして、その試みは成功しているのであろうか。

本章では、上記の問題意識の下、次の 3 つの作業をおこなう。まず、ゲルナーが『民族とナショナリズム』において、近代と前近代という時代区分をどのように設定し、この時代区分の中にナショナリズムをどのように位置づけているのかを確認する。続いて、アントニー・スミスが『ネーションとエスニシティ』において、ゲルナーによって設定された時代区分のどのような点を問題視し、それをどのように乗り越えようとしたのかを辿る。

¹ 1980 年代初頭に発表されたナショナリズムに関する代表的な著作としては、アームストロングの『ナショナリズム以前の国民』[Armstrong 1982]、ジョン・ブリュエリーの『ナショナリズムと国家』[Breuilly 1982]、エリック・ホブズボウムの『伝統の創造』[Hobsbawm 1983]等が挙げられる。

² ナショナリズムの成立をめぐる論争に関しては、吉野の著作に詳しい[吉野 1997]。

最後に、上記 2 つの作業の成果を踏まえた上で、スミスが『ネーションとエスニシティ』において、エトニという共同体概念をどのように定立しているのか、そして、この概念をネーションとどのように関係づけているのかを確認する作業を通じて、スミスがゲルナーの乗り越えに成功しているのか否かを検討する。

1 ゲルナーとナショナリズム

ゲルナーは『民族とナショナリズム』第 1 章「定義」の冒頭において、ナショナリズムを次のように定義する。

ナショナリズムとは、第一義的には、政治的な単位 *the political unit* と民族的な単位 *the national unit*³ とが一致しなければならないと主張する一つの政治的原理である。感情としての、あるいは運動としてのナショナリズムは、この原理によって最も適切に定義することができる。ナショナリズムの感情とは、この原理を侵害されることによって喚び起される怒りの気持ちであり、また、この原理が実現されたときに生じる満ち足りた気分である。ナショナリズムの運動とは、この種の感情によって動機付けられたものにほかならない[ゲルナー 2000: 1 (Gellner 1983: 1)]。

ゲルナーによると、ナショナリズムが「政治的な単位と民族的な単位とが一致しなければならない」と主張するのは、この原理が侵害される事態、すなわち政治的な単位と民族的な単位とが一致しないという事態に拠っている。ゲルナーにとって、両者が一致しないと

³ 一般に *nation* という単語には、「国家」という日本語と「民族」という日本語をあてることが可能である。この場面の *nation* には、どちらの日本語をあてるのが適当だろうか。ここでは、上掲のナショナリズムの定義を敷衍した次の記述に着目したい。“In belief, nationalism is a theory of political legitimacy, which requires that ① *ethnic boundaries* should not cut across ② *political ones*, and, in particular, that ① *ethnic boundaries* within a given state should not separate the power-holders from the rest (つまり、ナショナリズムとは、エスニックな境界線が政治的な境界線を分断してはならないと要求する政治的正統性の理論であり、なかんずく、ある所与の国家内部にあるエスニックな境界によって権力を握るものが他の人々から切り離されてはならないと要求するそれである) [Gellner 1983: 1 (ゲルナー 2000: 2) (下線および丸付き数字は引用者による)]。”ここでは、ナショナリズムが *ethnic boundaries* (下線①) と *political boundaries* (下線②) との不一致を「耐え難い侵犯」とみなし、両者の一致を希求する原理であるという見解が示されている。この見解が、今問題にしているナショナリズムの定義を敷衍したものであるという点を考慮すると、この見解に登場する *ethnic boundaries* (下線①) に含まれる *ethnic* という形容詞が、*national* という形容詞と同義で用いられているということが明らかとなる。したがって、ここでの *nation* に「国家」ではなく、「民族」という日本語をあてる邦訳版の判断は妥当であり、本論も邦訳版に倣い、この語に「民族」という日本語をあてることとする。ただし、この語は文脈に応じて「国家」という意味を有することもある。その場合は慣例に倣い、「民族」ではなく「ネーション」という日本語をあてることとする。なお、『ネーションとエスニシティ』の邦訳版は、この語に「ネイション」という日本語をあてているが、本論内部の表記に一貫性をもたせるため、「国家」の意味で用いられている *nation* に対しては「ネイション」ではなく、「ネーション」という日本語をあてることとする。

いう事態こそ、ナショナリズムに特有の「怒りの気持ち」を喚起する当のものなのである⁴。

ゲルナーは上記のようにナショナリズムを定義した後、その萌芽を「人類史」の中に捜し求める旅へと読者を導いてゆく。『民族とナショナリズム』第2章「農耕社会における文化」は、導入部に続いて、「農耕－識字政体における権力と文化」、「文化」、「農耕社会における国家」、「農耕社会の支配者の種類」という4つの部分から構成される。

導入部において次のような時代区分けが示される。

初め、読める者は誰もいなかった。次に数人の者が読めるようになった。そしてついには、全員が読めるようになる。ともかく、こういう仕方での読み書き能力は人間の三つの偉大な時代に適合しているように思われる[ゲルナー 2000: 14]。

ゲルナーは読み書き能力の配分を基準に、「読める者が誰もいなかった」時代、「数人の者が読めるようになった」時代、「全員が読めるようになる」時代を、それぞれ前農耕時代、農耕時代、産業時代と名づけた上で、農耕時代の社会構造を次のように説明する。

典型的な農耕－識字政治体においては、支配階級は人口の中での少数者を形成し、彼らは圧倒的多数者である直接農耕従事者、つまり農民から厳格に分離されている。彼らのイデオロギーは、諸階級の不平等性と支配者層の隔たりの程度とを控えめに見せるよりも、むしろ誇張しようとする。(…) おそらく、農耕－識字社会に関する中心的かつ最も重要な事実は以下の点にある。すなわち、その社会におけるほとんどすべてのことが、文化的境界によって政治的単位を画定することを妨げるということである[ゲルナー 2000: 16, 18-19 (中略は引用者による)]。

ゲルナーは「農耕－識字政治体における権力と文化」という小節を締めるにあたって、農

⁴ 上に掲げた引用箇所には、ゲルナーのナショナリズム定義の核心が見て取れる。『民族とナショナリズム』においてゲルナーは開口一番、ナショナリズムの原理を提示する。その上で、この原理からのずれによって2種類の感情が誘発され、これら2種類の感情に動機づけられて2種類の運動が生じると主張する。ゲルナーにとってナショナリズムとは、こうした原理、感情、運動のつながりの総体のことである。ここでは、この定義に含まれる「一致しなければならない」という表現に注目したい。この場面でゲルナーが設定するロジックに従うならば、政治的な単位と民族的な単位とが「一致しなければならない」のに実際には一致していないからこそ、両者を一致させるような運動がでてくる。逆に、両者が一致し人々が「満ち足りた気分」に浸っているときには、いかなる運動も生じ得ない。したがって、ナショナリズムが原理、感情、運動の総体であるとするならば、ナショナリズムの原理が実現され人々が満ち足りているという状況は、それがいかなる運動をも喚起し得ないという点で、ゲルナーの言うナショナリズムの定義を満たさないのである。よって、本論では以後、政治的な単位と民族的な単位が一致しない状況（原理が実現されない状況）とそれに伴う感情（「怒りの気持ち」）および運動（一致へ向けた運動）の総体を、ゲルナーのナショナリズム定義の核心として取り扱っていくことにする。

耕時代においては政治と文化、すなわち政治的な単位と民族的な単位はそれぞれ異なる基準で組織されており、それらが一致することはありませんと結論づける。

続く『民族とナショナリズム』第3章「産業社会」は、導入部に続いて、「永続的成長の社会」、「社会遺伝学」、「普遍的な高文化の時代」という3つの部分から構成される。導入部においてゲルナーは、数人の者が読めるようになった農耕時代から、全員が読めるようになる産業時代にかけての認識論的移行に焦点を合わせ、産業時代に特有の経済と生産の拡大が、複雑で洗練された分業と新しい種類の社会的流動性とを招来すると主張する。

続いてゲルナーは「永続的成長の社会」の中程において、産業社会に特有の複雑で洗練された分業および新しい種類の社会的流動性をもたらす教育制度の考察に歩を進め、次のように結論づける。最高度に専門化された産業社会における教育制度は、「かつて存在した中でも、明らかに最も専門化の度合いが少なく、最も普遍的に標準化されて」おり、「産業社会に見出されるような種類の専門化は、まさに非専門的で標準化された訓練という共通土台に基づいている」[ゲルナー 2000: 46]。

さらにゲルナーは「社会遺伝学」において、農耕時代における教育が共同体内部の一対一の訓練という形態をとるのに対して、産業時代における教育は集団的な族外教育という形態をとると主張する。ゲルナーによると、産業時代の人々は、こうした教育によって普遍的な読み書き能力と高水準の計算技術能力を獲得する。そして、これらの能力によって、最高度に専門化された分業と社会的流動性とが可能になるという。続いて、産業時代において、なぜこれほどまでに普遍的な読み書き能力が求められ、最も普遍的に標準化された教育が施されるのかという問いを投げかけ、産業時代における職業活動の実質に目を向ける。ゲルナーは、労働が対象物を動かすことから意味を操作することに重点を移したことによって、必要とされるコミュニケーションの形態が粗雑なものから明示的で厳密なものへと変容したという事実と照準を合わせ、産業時代に要請されるこうしたコミュニケーションの形態の根本的変容が族外教育⁵、ひいてはナショナリズムを招来するという主張を展開する。

以上概観してきた『民族とナショナリズム』第2、3章における議論の展開は、次のように整理できる（以下の番号は議論の順序を示す）。

1. 読み書き能力の配分を基準に、農耕時代と産業時代を明確に区別する。
2. 農耕時代、産業時代の経済状況を対比する。
3. 農耕時代、産業時代の社会構造を対比する。
4. 社会構造の観点より、ナショナリズムは産業時代の産物であると主張する。

⁵ ここで言う族外教育とは、「親密な地域単位」、すなわち「同族集団」の外側で施される教育のことである。

このようにゲルナーは、社会構造の観点より、ナショナリズムは産業時代に生み出されると主張する（項目 4）。

それではゲルナーは、ナショナリズムが生み出される産業時代に特有の社会構造をどのようなものと想定しているのであろうか。農耕時代、産業時代それぞれの社会構造に関するゲルナーの議論を整理すると、次のようになる。

- 農耕社会：成員全員が同一の文化に属さない社会。もしくは、政治的な単位と民族的な単位とが一致しない社会。
- 産業社会：成員全員が同一の文化に属する社会。もしくは、政治的な単位と民族的な単位とが一致する社会。

今一度、本節冒頭で確認した、ゲルナーによるナショナリズムの定義を想起されたい。そこでは、ナショナリズムは「政治的な単位と民族的な単位とが一致しなければならないと主張する」政治的原理と定義されていた。この定義に従うなら、ナショナリズムは政治的な単位と民族的な単位とが一致しない不条理な現実と、両者が一致しなければならないという理想の懸隔に「怒りの気持ち」をたぎらせるはずである。ところが、上で整理したように、『民族とナショナリズム』第 2、3 章の議論によると、産業時代の社会は政治的な単位と民族的な単位とが一致する社会である。このような社会では、産業時代に特有の分業体制によって、ナショナリズムが希求するはずの理想はすでに達成されてしまっているようにみえる。

政治的な単位と民族的な単位の一一致が織り込み済みの産業時代の社会に、両者の一致を切望するナショナリズムはどのように生じるのであろうか。この点に関してゲルナー自身ははっきり明言していない。しかし、次のように考えるとこの疑問は解消される。産業時代に特有の分業体制は、完全には政治的な単位と民族的な単位とを一致させることができない。しかし、産業時代に特有の分業体制の作用によって、少なくとも両者の一致が想定されるようにはなった。両者の一致が想定される状況下にありながらそれが完全には実現されない場合に、両者の一致を強烈に希求するナショナリズムの感情がわきあがる。すなわち、ナショナリズムは両者の一致が想定され得なかった農耕時代には生まれえず、両者の一致が想定されるようになった産業時代にはじめて生み出される、と。

以上本節では、ゲルナーが『民族とナショナリズム』において、近代（産業時代）と前近代（農耕時代）という時代区分をどのように設定しているのか、そして、この時代区分の中にナショナリズムをどのように位置づけているのかを跡づけてきた。次節では、スミスが『ネーションとエスニシティ』において、こうした時代区分のどのような点を問題視し、それをどのように乗り越えようとしたのかを明らかにしたい。

2 スミスの挑戦

スミスは『ネーションとエスニシティ』第1章「ネーションは近代の産物か」の中で、次のように述べている。

ネーションは、資本主義とか官僚制とか現世的な功利主義と同じような、純粹に近代の発展の産物である。そのルーツを、人間性や歴史一般に求めることはできない。それは、まったく近代の付随的な現象である。ネーションとナショナリズムは、多少のずれはあるものの、18世紀後半に生み出されたといって、まちがいない。(…)私はこのような見解を、ネーションとナショナリズムにかんする「近代主義的」見解と呼ぶことを提案したい[スミス 1999: 10-11 (中略は引用者による)]。

この場面でスミスは、ネーションを近代に特有の現象であるとみなす見解を近代主義と名づけている。そして、『近代主義者』の立場の、最も興味深い率直な言明は、ベネディクト・アンダーソンとアーネスト・ゲルナーの最近刊行された二冊の本に現れている」[スミス 1999: 12]とした上で、近代主義の主張を次のように要約する。

このような分析方法のすべてが共通にもっているのは、ナショナリズムは近代に付随したものであり、ネーションは近代的な性格をもっているという信念である。(…)ネーションとナショナリズムは、近代と近代文明に相関関係をもつ、近代と近代文明の派生物にほかならない[スミス 1999: 13 (中略は引用者による)]。

スミスはこうした近代主義の見解を次のように評価する。

ある意味で「近代主義者」は正しいと、私は考える。イデオロギーとして、また運動としてのナショナリズムは、18世紀後半から起こった現象である。また「民族国家」も、政治的標準としては、まったく近代的なものである[スミス 1999: 10-11, 14]。

このように、スミスは一旦近代主義者の主張を認めた上で、次のように反論する。

しかしこうした「近代主義者」の見解についても、難点がある。というのは、前近代において、古代的世界においてさえ、ナショナルな一体性やナショナルな性格という「近代的な」思考に著しく類似したものが、発見されるからである。(…)また古代の世界には、いくつかの点で近代のナショナリズムに類似していると思われる諸々の運動が、見いだされる。(…)紀元前14世紀のエジプトのテル・エル・アマルナ時代には、近代のシステムに類似した古代的な民族国家さえ、存在していた。この時代に、

エジプト新王朝、ヒッタイト帝国、メソポタミアのミタンニ王国、カッシート人のバビロン王国などの強力な国家が数多く存在し、外交的・軍事的な同盟と対立関係の複雑なネットワークを形成していた。こうしたネットワークは、ずっとのちの近代ヨーロッパを特徴づけるものに類似していた。このような事実を考慮するとき、ネーションとナショナリズムを、純粹に近代的な現象であると考えすることは、本当に正しいのであろうか[スミス 1999: 14（中略は引用者による）]。

ここでの近代主義者の主張に対するスミスの反論のポイントは、以下の3点である。

- 前近代、古代的世界にも、ナショナルな一体性があった。
- 前近代、古代的世界にも、ナショナリズムに類似した運動が見出される。
- 近代システムに類似した古代的民族国家間のネットワークが存在した。

スミスは上記3つのポイントから近代主義者の主張を斥けた上で、「ナショナルな紐帯や感情は人間の普遍的な属性である」という原初主義者の主張を提示する。さらに、こうした原初主義者の主張からネーションの自然性に関する命題を取りのぞき、ネーションの恒久性に関する命題のみを残した主張を永続主義と名づけた後、この永続主義の主張も問題があるとして斥ける。永続主義に対するスミスの反論のポイントは次の3点に整理できる。

- 集合的な文化的紐帯は、普遍的であるとはいえない。
- 人間の所属欲求や宗教団体への欲求は、ネーションやナショナリズムの形成と持続性とを説明しない。
- 古い集合的な文化的紐帯と近代的なネーションとの関係に関しては、経験的に確認される必要がある。

こうしてスミスは、3つの立場（近代主義、原初主義、永続主義）を1つ1つ丹念に選り分けた末に、ある1つの立場に辿りつく。この立場こそ、スミスが自ら歴史主義と名づける立場である。スミスは、近代と前近代の間に断絶を見出す先達らの主張が孕む実証的な脆弱さを問題視し⁶、「社会学者が明確に二分する傾向のある『伝統的な』時代と『近代的』な時代」との間に「極めて大きな連続性があること」を認めるべきだと主張する一方、「近代的なものによってもたらされた諸々の諸変革や、私たちが人間として忠誠心をもち、そのなかで働き生活している基礎的な単位に対する近代の影響に、しかるべき重みを与え

⁶ 本節の前半部分で箇条書きにした、近代主義の主張に対するスミスの反論を参照のこと。

る」べきだと主張することによって、近代主義と原初（永続）主義の狭間に新たな立場を立ち上げるのである[スミス 1999: 16-17]。

以上本節では、スミスがゲルナーによって設定された時代区分のどのような点を問題視し、それをどのように乗り越えようとしたのかを簡単に辿ってきた。次節では、スミスがゲルナーの議論の乗り越えに成功しているのかどうかを検討したい。

3 ゲルナーの遺産

スミスは『ネーションとエスニシティ』第2章「エスニックな共同体の基礎」において、前近代的共同体をエトニと名づけ⁷、神話、記憶、価値、象徴を共有する人間集団と定義している[スミス 1999: 29-39]。本節で問題にしたいのは、スミスが『ネーションとエスニシティ』において、エトニという概念をどのように定立しているのか、そしてこのエトニをネーションとどのように関係づけているのかという点である。

スミスは『ネーションとエスニシティ』第3章「農耕社会における階級とエトニ」の中で、エトニにおける文化的同質性（多様性）に関して次のように述べている。

これまで提起されてきた証拠に拠れば、文化的同質性は、多くの場合、達成されており、明確な文化的一体性を示しているエスニックな共同体が、世界のさまざまな地域に存在したことを示すことができよう。私たちは、このような証拠と、ゲルナーの農耕社会における階級と文化に関する見解とを、どのようにして一致させることができるのであろうか。本当に、上層階級の文化は、農民がそれぞれにもっていた文化とは、一般的にみて、まったく異なった性格を持っていたのであろうか。諸階級の間で、共通するアイデンティティを意識することがなかったというのは、本当なのであろうか[スミス 1999: 83-84]。

スミスは、文化的一体性を示すエスニックな共同体が、前近代においても世界の様々な地域に存在したという証拠をもとに、ゲルナーがモデル化した農耕時代に特有の社会的状況を「水平的－貴族的エトニ」と「垂直的－平民的エトニ」という構図で捉えなおす。「水平的－貴族的エトニ」とは、社会の上層部に漠然と広範囲に広がるエトニのことである。注意すべきは、このエトニでは、社会の上層と下層の文化が異なっているという点である。この点で、「水平的－貴族的エトニ」における文化状況は、ゲルナーが提示する農耕社会における文化状況と一致する。ところがスミスは、もう1つのエトニの存在を指摘し、「垂直的－平民的エトニ」と名づける。社会の上層と下層が文化を共有するこのエトニこそ、

⁷ スミスは、『ネーションとエスニシティ』第1章「ネーションは近代の産物か」の中で、エスニックな共同体をエトニと名づけた上で、ネーションとの対比の中で、この共同体を前近代的共同体と位置づけている[スミス 2000: 16-17]。

ゲルナーが見逃したものである。

スミスは、「垂直的－平民的エトニ」を詳説した節の最後を次のように締めくくる。

こうした関心（被支配者に忠誠の基盤を与えることに対して支配者が抱く関心）の副産物として、明確なエスニックな政治体が、明らかに成長してくる。それは、大多数の人々が単一のエトニによって構成された、政治体を意味している。(…) まさにこうした基盤から、ネーションやナショナリズムが現れてきた[スミス 1999: 109（中略および括弧内の語句は引用者による）]。

上掲の引用箇所の中で注意すべきポイントは、次の 2 点である。

1. ネーションが政治体とエトニの融合したものと捉えられている。
2. エトニの中にネーションが出現する契機が見出される。

まず、この場面でスミスが、ネーションを政治体とエトニが融合したものと捉えている点に着目したい（項目 1）。こうしたネーションの捉え方は、スミスのオリジナルではない。本章第 1 節で確認したように、ゲルナーは『民族とナショナリズム』の中で、ナショナリズムを政治的な単位と民族的な単位の一一致を希求する原理と捉えている。この事実は、スミスがネーションを規定するにあたって、ゲルナーのナショナリズム観を前提としているという事実を指し示している。

この事実を踏まえた上で、ゲルナーの『民族とナショナリズム』の次の一節に注目すると、ゲルナーとスミスの共同体概念をめぐる接点が浮かび上がってくる。

われわれにとって関心のある設問は次のようなものである。つまり、(…)〈農耕時代〉に、ナショナリズムの本質である①文化と②政治体との融合を生み出す諸力が存在するかどうか、という設問である。答えは「否」であるに違いない。③地方的な共同体は、それらが機能するためにはかなりの程度顔と顔とを直接つきあわせる触れあいに依存しなければならず、したがって、規模の点で大幅に拡張するには見分けのつかぬほど姿を変えてしまわなければならない[ゲルナー 2000: 23（鉤括弧内の語句（農耕時代）は引用者による補訳、下線と丸付き番号は引用者による）]。

この場面でゲルナーは、農耕時代には「ナショナリズムの本質である文化と政治体との融合を生み出す諸力」は存在しないと主張している。本論では次の 2 点に注目したい。1 つは、『民族とナショナリズム』冒頭のナショナリズムの定義で用いられていた民族的な単位

という語が、この場面では、文化（下線①）という語に置き換えられているという点⁸。いま1つは、当該引用箇所の中で、文化（下線①）という語が、地方的な共同体（下線③）という語と対応しているという点である⁹。以上2点より、『民族とナショナリズム』冒頭のナショナリズムの定義で用いられていた民族的な単位という語が、この場面で用いられている地方的な共同体（下線③）という語と対応しているということが明らかとなる。更にこのことから、仮にスミスの言うエトニがゲルナーの言う民族的な単位と一致しているとするならば、スミスがこのエトニという概念を、ゲルナーの言う「かなりの程度顔と顔を直接つきあわせる触れあいに依存する」地方的な共同体を前提に定立しているということが明らかとなる。

先に掲げた『ネーションとエスニシティ』第3章「農業社会における階級とエトニ」の冒頭の一節も、この主張を支持している。注意すべきは、自らのエトニ概念を練り上げ、エトニがネーションへと転換する契機を示唆するこの大事な局面で、スミスが、ゲルナーの共同体概念と自らの概念との相違を問題にしていないという点である。たしかにスミスは、ゲルナーの見解に反対している。しかし、ここでのスミスの論点は、あくまでエトニ内部での文化的一体性（あるいは多様性）にある。その主張は次のように敷衍できる。ゲルナーは農耕時代の社会状況に関して、1つの政治体制内での文化的多様性を強調する。しかし、この時代には文化的一体性を誇るエトニもあったのであり、こうしたエトニ（「垂直的－平民政体的エトニ」）の存在を見逃してはならない、と。スミスは文化的一体性（多様性）の点ではゲルナーの見解に異議を唱えるが、ゲルナーの共同体概念と自らのそれとの間の概念上の差異に関しては問題にしないのである。ここからも、スミスがエトニ概念を、ゲルナーの共同体概念を前提に定立しているという事実が読みとれる。

しかし、だからといって、スミスがゲルナーの議論を乗り越えることができなかったと結論づけるのは早計である。ここで、スミスがエトニをネーションの起源とみなしている点を検討したい（本論10頁の項目2）。この点からは、神話、記憶、価値、象徴を共有するエトニこそが、ネーションの歴史的基礎であるという主張を読み取ることができる。すなわち、スミスにとってネーションとは、エトニが発展した共同体のことである。

ところが、スミスはネーションとエトニの関係に関して、『ネーションとエスニシティ』第9章「ネーションの系譜」の中で、次のように述べている。

⁸ 本章第1節で述べたように、ゲルナーはナショナリズムを政治的な単位と民族的な単位とが一致しなければならないと主張する政治的原理と定義している。ところが、この場面では、「ナショナリズムの本質は文化と政治体との融合」とであると述べている。これら2点を踏まえると、当該引用箇所における文化という語が、民族的な単位という語と同義で用いられているということが明らかとなる。

⁹ 当該引用箇所の始めの文でゲルナーは、ナショナリズムの本質である文化と政治体の融合が農耕時代には起こりえないという主張を提示する。次の文はその理由、すなわち、なぜ文化と政治体の融合が農耕時代には起こりえないかを説明する文である。よって、この文の主語である地方的な共同体は前文の文化と対応している。

ネーションは、もしそれが生き残るとすれば、エスニックな核を必要とする。もしそうした核がないとすれば、ネーションは、エスニックな核を「ふたたびつくりださ」なければならない。このことは、都合のよい確信できる過去を発見し、それを再構成することによって、構成員と部外者とのそれを再提示しなければならないことを意味している。最初のヨーロッパのネーションは、強力な結合力のあるエスニックな核を中心として形成され、これらの国家は、近隣のエトニを合体し、文化的に変容させることにさえ、成功した。東ヨーロッパや中近東にのちに現れた国家は、こうしたエスニックな核に明確に適合するよう、考案されてきた[スミス 1999: 249]。

この場面でスミスは、東西ヨーロッパおよび中近東の事例を示しながら、ネーションはエスニックな核を必要とする主張する。すなわち、スミスにとってネーションとは、エトニが発展した共同体のことであると同時に、神話、記憶、象徴、価値といったエスニックな核を必要とする共同体のことでもある。

以上の議論を踏まえると、『ネーションとエスニシティ』におけるエトニとネーションの関係は次のように整理できる。

- エトニが発展してネーションとなった。
- ネーションはエスニックな核を必要とする。

このように、スミスはエトニに 2 つの役割を与えている。1 つはネーションの歴史的基礎という役割、いま 1 つはネーションの構成的基礎という役割である。

スミスは、自身の共同体概念を定立するにあたって、ゲルナーの共同体概念を前提としつつも、「社会学者が明確に二分する傾向のある『伝統的な』時代と『近代的』な時代」との間に「極めて大きな連続性があること」を認めることによって、前近代共同体をネーションの歴史的・構成的基礎と捉える視点を獲得している。こうした視点は、近代と前近代を明確に区分した上で、ナショナリズムの特異性を強調するゲルナーの議論にはみられなかったものである。この点でスミスはゲルナーの乗り越えに成功していると言える。

それでは、この乗り越えは、どのような射程を有するのであろうか。次章では、アンダーソンが『想像の共同体』において、ネーションと前近代的共同体をどのように関係づけているのかを明らかにする作業を通じて、この問いに答える端緒を探りたい。

Ⅲ ネーションと原初的な村落

ベネディクト・アンダーソンは『想像の共同体』の中で、ネーションを次のように定義する。

ネーションとはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である[アンダーソン 1997: 24]。

ネーションを實在の領野から引き剥がし、觀念の世界へと送り込むこの力強い一撃は、幾分トーンを落として次のようにフォローされる。

日々顔付き合わせる原初的な村落 (primordial villages of face-to-face) より大きいすべての共同体は (そして、おそらくはそうした原初的な村落でさえ) 想像されたものである[アンダーソン 1997: 24 (Anderson 1983: 13)]。

本章で注目したいのは、この「日々顔付き合わせる原初的な村落」である。以下では、この原初的な村落が、『想像の共同体』の中でどのような役割を果たしているのかを明らかにしたい¹⁰。

1 アンダーソンと時代区分

『想像の共同体』第Ⅱ章「文化的根源」は、印象深い一文によって開始される。

無名戦士の墓と碑、これほど近代文化としてのナショナリズムを見事に表象するものはない[アンダーソン 1997: 32]。

この文は次のように受け継がれる。

こうした記念碑の文化的意義は、たとえば、無名マルクス主義者の墓とか自由主義戦没者の碑とかをあえて想像してみれば、明らかであろう。いいしれぬ滑稽さを感じずにはおられまい。それは、マルクス主義も自由主義も、死と不死にあまり関わらないからである。一方、ナショナリズムの想像力が死と不死に関わるとすれば、このことは、それが宗教的想像力と強い親和性を持っていることを示している。この親和性は偶然ではない。したがって、ナショナリズムの文的根源について考察するにあたり、まずは、あらゆる宿命のきわみとしての死について考察することからはじめよう[アンダーソン 1997: 32]。

¹⁰ 上記引用箇所において、ネーションと古典的共同体が完全に觀念の世界に分類されているのに対して、原初的な村落は觀念の世界と實在の世界の狭間に取り残されている。この事實は、『想像の共同体』における原初的な村落の特殊な位置づけを予感させる。

こうして、死と不死に密接に関わるという点から、ナショナリズムの想像力と宗教的想像力の親和性が導き出され、ネーション以前の共同体として宗教共同体が指定される。アンダーソンは、宗教共同体、すなわち古典的共同体の特性を次のように記す。

聖なる言語で結ばれたこうした①古典的共同体は、②近代国民の想像の共同体とははっきり違う特性をもっていた。決定的な違いのひとつは、③古い共同体が、その言語の固有の神聖性について揺るぎない自信をもっており、したがって、だれをこの共同体の成員と認めるかについてもはっきりとした考えを持っていたことにある[アンダーソン 1997: 36 (下線および丸付き数字は引用者による)]。

この場面では、「はっきり違う」、「決定的な違い」といった強い表現によって、古典的共同体とネーションの断絶がくっきりと徴づけられる。

ここでは上掲の引用箇所の中で、ネーションが古典的共同体（下線①）との対比に際して、近代的な共同体（下線②一部）と言い換えられている点に着目したい。ネーションが近代的な共同体と想定されるとき、ネーションと対比される古典的共同体は、必然的に前近代的共同体として立ち上がる。実際、当該引用箇所の中で、古典的 classical（下線①一部）という必ずしも時間的なニュアンスのみに限定されない形容詞が、古い old（下線③一部）という時間的な意味合いを強く想起させる形容詞に置き換えられている。この事実から、古典的共同体（下線①）が前近代的共同体として想定されており、ネーションと古典的共同体（下線①）の対比がある特定の時間軸上でなされていることが読みとれる。『想像の共同体』では、ネーションが近代へ、古典的共同体が前近代へと割り振られた上で、両者の相違がことさらに強調されるのである。

このように、ネーションと古典的共同体は、近代と前近代という時代区分をそれぞれ背負いながら全編に渡って対照され続ける。こうしたネーションと古典的共同体の間の分かれがたい関係を考えるとき、原初的な村落は余計なものに見えてくる。果たして原初的な村落は、ただ単に書き手の気の迷いでテキストに書きつけられた、取るに足りないものなのであろうか。以下では上記の問いを念頭に、「日々顔付き合わせる原初的な村落」が、『想像の共同体』の中でどのような役割を果たしているのかを考えてみたい。

2 アンダーソンと共同体

『想像の共同体』第Ⅱ章「文化的根源」において、宗教共同体の衰退を2つの観点から整理し、雑婚を旨とする「王国」の盛衰を論じた後、アンダーソンは読者を議論の核心へと導いてゆく。アンダーソンは、「ネーションを『考える』ことを可能にした」「世界理解の様式」の「根本的变化」を時間観念の変容に収斂させる。時間観念の変容こそ、人々が「ネーションを『考える』ことを可能にした」当のもの、というわけである。

では、人々が「ネーションを『考える』ことを可能にした」時間観念の変化とは、一体どのようなものであったのだろうか。アンダーソンは、中世における同時性の観念を「メシア的時間」、すなわち「即時的現在における過去と未来の同時性」と括る。そして、この観念を「我々自身のもつ同時性の観念」であるところの「均質で空虚な時間」と対置した後、時間観念の変容がネーションの誕生に果たした役割を明らかにすべく、小説と新聞という「18世紀ヨーロッパにはじめて開花した2つの想像の様式」の考察へと読者を導いてゆく。

小説と新聞の考察における最初の題材は、「安手の3ドル小説」である。

男（A）には妻（B）と愛人（C）がおり、愛人には別に情夫（D）がいる。するとこの話における時間表は次のようなものと想定できる。（…）この時間連鎖のなかで、AとDが一度も出会わないことに注意されたい。いやそれどころか、Cがうまくやっていたら、AとDはたがいの存在さえ知らないでいるかもしれない[アンダーソン 1997: 50（中略は引用者による）]。

アンダーソンは、「均質で空虚な時間」に関する「複雑な注釈」であるところの「安手の3ドル小説」において、AとDが「たがいの存在さえ知らないでいるかもしれない」ことに読者の注意を向けさせた上で、次のように議論を展開する。

それでは、AとDを実際に関係付けているのはなにか。第一に、①その住民は、たがいに知り合うこともなく通りですれ違い、それでいてなお、たがいに関連しあっていると描写することができる。第二に、AとDは全知の読者の頭の中にはめ込まれている。読者だけが、さながら神のごとく、AがCに電話し、Bが買物し、Dが玉突きするのを、すべて同時に眺めることができる。②これらすべての行為が、時計と暦の上で同じ時間に、しかし、おたがいほとんど知らないかもしれぬ行為者によって行われているということ、このことは、著者が読者の頭の中に浮かび上がらせた想像の世界の新しさを示している[アンダーソン 1997: 50-51（下線および丸付き数字は引用者による）]。

これら2つのフレーズ（下線①および②）は、ネーションの定義を敷衍する次の一節を想起させる。

ネーションは想像されたものである。というのは、いかに小さな国民であろうと、③これを構成する人々は、その大多数の同胞を知ること、会うことも、あるいはかれらについて聞くこともなく、それでいてなお、ひとりひとりの心の中には、共同のコ

ミュニオンのイメージが生きているからである[アンダーソン 1997: 24 (下線および丸付き番号は引用者による)]。

「それでいてなお」という逆接の接続詞¹¹を等しく含む2つのフレーズ(下線①および③)はともに、この接続詞を基点に論旨が反転しており、その様子は次のように整理できる。なお、「／」は逆説の接続詞を表す。

- 下線①：住民はたがいに知り合うこともなく通りですれ違う／たがいに関連しあっている
- 下線③：ネーションを構成する人々は、その大多数の同胞を知ること、会うことも、聞くこともない／ひとりひとりの心の中には、共同のミュニオンのイメージが生きている

下線①および③から共通部分を析出すると、次のように整理できる。

- (x) 人々が互いに顔見知りでない／(y) 共同のミュニオンのイメージが醸成される

また、(x) 〈人々が互いに顔見知りでない〉、この命題を肯定文に変換した命題を(～x)とおくと、(～x)は(y)と順接「→」でつながり、次のような命題が導かれる。

- (～x) 人々が互いに顔見知りである → (y) 共同のミュニオンのイメージが醸成される

「それでいてなお」、この接続詞は、アンダーソンが共同のミュニオンからの逸脱としてネーションを定立する際の常套句であり、それが有する逆説のニュアンスは、そのままネーションならびにナショナリズムに対する論者の不信を反映している。(～x) 〈人々が互いに顔見知りである〉、本来この状態においてこそ、(y) 〈共同のミュニオンのイメージが醸成される〉はずであるが、殊ネーションにおいては、(x) 〈人々が互いに顔見知りでない〉にも関わらず(y) 〈同胞として結びつけられ、ミュニオンが想像されてしまう〉、この点でネーションは常軌を逸している、というわけである。

顔見知りでない人々が結びつけられてしまう、そんなネーションをめぐる想像力へのア

¹¹ 邦訳版では、and still や yet、but という接続詞に「それでいてなお」という一通りの訳語が当てられている。本論では、これら幾通りかの接続詞に「それでいてなお」という1つの訳語を当てる邦訳版の解釈に依拠する。

ンダーソンの不信は、次の記述にも窺える。

(x') ひとりのアメリカ人は、2 億 4 千万余のアメリカ人同胞のうち、ほんの一握りの人以外、一生のうちで会うことも、名前を知ることもないだろう。まして彼には、あるとき、かれらが一体何をしようとしているのか、そんなことは知るよしもない。しかし、それでいて、(y') 彼は、アメリカ人のゆるぎない、匿名の、同時的な活動についてまったく確信している[アンダーソン 1997: 51-52 (下線および (x')・(y') は引用者による)]。

ここでも不信は軽蔑へと変換され、(x)〈人々が互いに顔見知りでない〉というフレーズと (y)〈人々が連帯を確信する〉というフレーズが、「しかし、それでいて」という接続詞、互いに顔見知りでないのにコミュニオンが醸成されてしまうネーションへの不信をにおわせる逆接の接続詞で結ばれている。

『想像の共同体』において、ネーションが顔見知りでない共同体とみなされ、その連帯のあり方に不信の眼差しが向けられる。この事実、古典的共同体との対比を通じてネーションを近代に封じこめようとする論者の目論見の傍らで、ネーションという概念が、「日々顔付き合わせる原初的な村落」からの逸脱として規定されているという事実を示している。たしかに原初的な村落は、先に掲げた冒頭の一箇所をのぞいてはテキストの前面に登場しない。テキストの前面で活躍するのはネーションと古典的共同体であり、原初的な村落の影は薄い¹²。しかし、一見テキストの中でさしたる役割を担っていないかのようにみえるこの原初的な村落は、ネーションが名指され書きつけられる度に秘かに召喚され、そのイメージを規定し続けるのである。

IV ナショナリズム研究の共同体観

第Ⅱ章では、スミスが『ネーションとエスニシティ』において、ゲルナーの共同体概念を前提にエトニ概念を定立しつつも、エトニをネーションの歴史的・構成的基礎と捉えることによって、ゲルナーの乗り越えに成功している点を指摘した。続く第Ⅲ章では、アンダーソンが『想像の共同体』において、「日々顔付き合わせる」共同体に原初性を見出し、そこからの逸脱としてネーションを規定している点を明らかにした。

本章では、上記 2 点の指摘を踏まえた上で、歴史主義の射程を明らかにし、今後のナショナリズム研究の方向性を示唆したい。

1 エクリチュールとパロールの物語

¹² 小田は、『想像の共同体』の冒頭に一度だけ顔を覗かせる原初的な村落に着目し、この概念を人類学的な実証研究において使用可能な概念へと練りあげている[小田 2001: 310-311]。

前章で明らかにしたように、アンダーソンは『想像の共同体』において、人々が互いに顔見知りである共同体、すなわち人と人との「日々顔付きあわせる」共同体を原初的な共同体とみなし、ネーションをそこからの逸脱として規定する。ゲルナーも『民族とナショナリズム』において、産業時代（近代）と農耕時代（前近代）を明確に区切ることによって、暴力にまみれた産業時代（近代）の社会から「顔と顔を直接つき合わせる触れあい」に依存する農耕時代（前近代）の共同体を隔離する。

スミスに関してはどうか。『ネーションとエスニシティ』にみられるスミスの共同体観の特徴は、次の2点に整理できる。

- 前近代的共同体を近代的共同体の歴史的・構成的基礎とみなす。つまり、前近代的共同体を共同体の基本的な形態とみなす。
- ゲルナーの共同体概念を前提にエトニ概念を定立する。つまり、前近代的共同体として、人と人との媒介を交えず直接向かい合う共同体を想定する。

以上2点より、スミスが『ネーションとエスニシティ』において、人と人との媒介を交えず直接向かい合う共同体を共同体の基本的な形態とみなしているということがわかる。こうしてみると、アンダーソン、ゲルナー、スミスが立場の違いを超えて、人と人との媒介を交えず直接向かい合う共同体を共同体の基本的な形態とみなしているということが明らかとなる。

「脱構築」の提唱者として有名なジャック・デリダであれば、こうした共同体観の出所を「形而上学的閉域」¹³に求めるであろう。もちろん、デリダがナショナリズム研究のテクストを分析したことは一度もない。「形而上学的閉域」からの脱出を素描した『グラマトロジーについて』においても、彼がターゲットとしたのは、プラトンであり、ルソーであり、レヴィ＝ストロースであった。しかし、西欧の知的世界において2000年という長きに渡って構築されてきたエクリチュール（文字言語、または書記行為）とパロール（音声言語、または語る行為）の間の非対称な関係に揺さぶりをかけ、「形而上学的閉域」からの脱出を模索するデリダの挑戦は、図らずも、時代区分をめぐる対立を超えて3人のナショナリズム研究者が共有する共同体イメージの出所を指し示すのである。

デリダは、初期の主著『グラマトロジーについて』において、クロード・レヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』の中にエクリチュールとパロールの非対称な関係を見出し、それ

¹³ 「形而上学的閉域」とは、ジャック・デリダが『グラマトロジーについて』の中で、真理の自己への現前という観点から、パロール（音声言語、または語る行為）を崇拝し、エクリチュール（文字言語、または書記行為）を軽蔑する伝統的な言説世界を否定的に名指した用語である。本論が念頭に置いているのはデリダの言う「形而上学」であり、実際の形而上学ではない。実際の形而上学は、現在においても多様な展開を見せており、本論の目的はこうした試みを否定することにはない。

をルソーのテキストと結びつける。

ここでわれわれは再びルソーへと導かれる。このエクリチュールの哲学（レヴィ＝ストロースのテキスト）の根底に横たわっている理想は、まさしく差延作用なしにそれ自身に直接的に現前している共同体のイメージであり、その中では全成員の話が聞き得るようなパロールの共同体のイメージである。（…）「水晶のような」構造をもち、全体が自身に現前している小共同体、自己自身の〈隣人づき合い〉の中に集められた小共同体、というこのモデルは、明らかにルソー的なものである。（…）〈自己への現前〉、差し向かいにおける透明な近接性、声の直接的射程、というこのような社会的本来性の規定は古典的なものである。これはルソー的であるが、すでにプラトン主義の遺産を受け継いでおり、〈法〉、〈権力〉、〈国家〉一般にたいする無政府主義的、絶対自由主義的抗議と相通ずるものであって、また十九世紀のユートピア的社会主義の夢と、ごく厳密にはフーリエ主義の夢と関連しているということを想起しよう。（…）声の届く範囲にたいする称賛は、エクリチュールへの軽蔑と相まってルソーとレヴィ＝ストロースに共通のものである[デリダ 1972: 上 271, 273-275, 277（中略および下線は引用者による）]。

レヴィ＝ストロースの共同体イメージを規定するとされる「〈自己への現前〉、差し向かいにおける透明な近接性、声の直接的射程」（下線部）は、本論で扱った 3 人のナショナリズム研究者の共同体観をも規定している¹⁴。

人と人とが媒介を交えず直接向かい合うパロールの共同体こそ、共同体の基本的な姿である。「形而上学的閉域」に根ざすこの前提こそ、アンダーソン、ゲルナー、そしてスミスが立場の違いを超えて共有する暗黙の前提である。彼らナショナリズム研究者は、近代主義者であれ歴史主義者であれ、具体的な人間関係にもとづくパロールの共同体に原初性を見出す精神をわかちあう。

とはいえ、ただ単に「形而上学的閉域」に根ざしているからといって、彼らが共有する前提は否定されるべきではない。それが孕む問題は、その系譜学上の布置そのものの中にはない。問題は、ネーションがパロールの共同体からの逸脱として、ア・プリオリに想定されてしまっている事態にこそある。「形而上学的」前提の下、ネーションがパロールの共同体からの逸脱としてア・プリオリに想定されるとき、その連帯は不自然な連帯とみなされ、その衝動は暴力と結びつけられる。アンダーソンおよびゲルナーのテキストに散見されるネーションやナショナリズムに対する不信の背後には、エクリチュールとパロールの哲学が見え隠れする。

¹⁴ このことは、彼らナショナリズム研究者が、人と人とが媒介を交えず直接向かい合う共同体を共同体の基本的な形態とみなしている点を考慮すれば明らかである。

2 スミスの可能性

最後に、前節までの議論を踏まえた上で、近代主義に対するスミスの挑戦が、いかなる射程を有するのかを検討したい。

アンダーソンおよびゲルナーは、「形而上学的」前提の下、人と人とが媒介を交えず直接向かい合うパロールの共同体を共同体の基本的な形態とみなし、ネーションをそこからの逸脱として規定する。スミスもパロールの共同体（エトニ）を共同体の基本的な形態とみなしている点で、近代主義者と変わらない。しかし、スミスはパロールの共同体からの逸脱としてエクリチュールの共同体（ネーション）を規定することはない。スミスにとってエクリチュールの共同体とは、パロールの共同体が発展した共同体のことであると同時に、エスニックな核を必要とする共同体のことでもある。

以上の議論を整理すると、次の表のようになる。

表 1：共同体分類対照表

	A（アンダーソン型）	B（スミス型）
I	パロール／エクリチュール	パロール→エクリチュール
II	—	パロール⊂エクリチュール

アンダーソンおよびゲルナーは、エクリチュールの共同体をパロールの共同体から逸脱したものとみなし、両者の断絶性を強調する（表 1 の I・A）。これに対してスミスは、パロールの共同体をネーションの歴史的基礎とみなし、両者の連続性を強調する（表 1 の I・B）。しかし、どちらの主張も、エクリチュールとパロールを相対させる「形而上学的」前提に依拠している点で変わりはない。

ところがスミスは、パロールの共同体をネーションの歴史的基礎とみなすと同時に、ネーションの構成的基礎ともみなしている（表 1 の II・B）。注意すべきは、この想定が、エクリチュールとパロールを相対させる「形而上学的閉域」においては可能ではないという点である。それは、「形而上学的閉域」の外側においてのみ可能となる。「ネーションは、もしそれが生き残るとすれば、エスニックな核を必要とする」[スミス 1999: 249]。この主張には、論者の認識論的な転換が刻み込まれている。

今一度、3 人のナショナリズム研究者の言葉に耳を傾けたい。スミスは言う。「どうして男といわず女までもが、自分たちの国のためにみずから進んで死んでゆけるのであろうか」[スミス 2000: 7]。アンダーソンは言う。「過去 2 世紀にわたり、数千、数百万の人々が、かくも限られた想像力の産物のために、殺し合い、あるいはむしろみずからすすんで死んでいったのである。これらの死は、我々を、ナショナリズムの提起する中心的問題に向かい合わせる。なぜ近年の、たかだか 2 世紀にしかない萎びた想像力が、こんな途方も

ない犠牲を生み出すのか」[アンダーソン 1991: 26]。ゲルナーは言う。「ある種のナショナリズム、とりわけヒトラーやムッソリーニ時代のそれが、なぜあれほどまでに猛毒を撒き散らすものになったのかを、本書の議論は説明できるとは主張していない」[ゲルナー 2001: 231]。

このように、ナショナリズム研究を代表する 3 つの古典は、2 つの世界大戦をめぐるトラウマと「形而上学的」前提とが交錯する地点に立ち上がっている。ナショナリズムを諸悪の根源とみなし、ア・プリオリに想定される連帯のあり方に不信をみなぎらせる態度を括弧に入れる¹⁵とき、我々は、従来のナショナリズム研究とは異なる仕方での記憶と対峙しう縁を手に入れることができるかもしれない。そして、その縁は、「形而上学的」前提に捉われながらも、共同体に関する構図を大幅に書き換えたスミスの試みに見出せるのである。

V おわりに

以上本論では、ナショナリズム研究を代表する 3 つの古典の読み直しを通じて、以下の点を明らかにしてきた。

- ナショナリズム研究の共同体観は、真理の自己への現前という観点から、暴力的なエクリチュールを軽蔑し、純真無垢なパロールを崇拝する「形而上学的」前提に依拠している。
- アンダーソンおよびゲルナーは、具体的な人間関係にもとづくパロールの共同体を共同体の基本的な形態とみなし、そこからの逸脱としてネーションを規定する。
- スミスもパロールの共同体を共同体の基本的な形態とみなす。この点で、スミスもアンダーソンらと変わらない。しかし、スミスはパロールの共同体からの逸脱としてネーションを規定することはない。スミスはパロールの共同体をネーションの歴史的・構成的基礎と捉えることによって、アンダーソンらによって両者の間に設定された関係を書き換えることに成功している。

¹⁵ この表現は、現象学的還元における現象学的エポケーを念頭に置いている。フッサールは『イデーン』の中で、意識が対象と素朴に関わる「自然的態度」による一般定立の遮断によって、純粹意識の領野が獲得されると主張する[フッサール 1979]。彼はこの「自然的態度」による一般定立の遮断という操作に関して、次のように述べている。「その定立（「自然的態度」による一般定立）は、それ自身において、それがそれであるものであり続けている一方で、われわれは、その定立を、いわば『作用の外に』置き、働かせないで置くのであり、われわれは、『スイッチを切ってその定立の流れを止め、その定立を遮断するのであり』、われわれは、『その定立を括弧に入れるのである』」[フッサール 1979: 137（括弧内の語句は引用者による）]。ここでは、ナショナリズムを諸悪の根源とみなし、ア・プリオリに想定される連帯のあり方に不信をみなぎらせる態度を一旦「遮断する」、あるいは、こうした態度による定立を「停止する」といった意味合いで用いている。

- 上記の書き換えは、「形而上学的閉域」の外側で行なわれている。こうした意味で、スミスの試みは、「形而上学的閉域」の外側から人と人とのつながりを描こうとする際に有効な指針となり得る。

本論の目的は、近代主義対歴史主義という対立図式の下で埋もれつつあったスミスの試みを捉えなおし、今後のナショナリズム研究がすすむべき途を示唆することにあつた。よって、本論が幾つかの議論の末に辿りついた結論が、3人のナショナリズム研究者が提起した問題意識を今後どのように継承し、発展させていくのかという問いかけに答えられているとするならば、本論の目的は達せられたと言えるであろう。

参考文献

アンダーソン、ベネディクト

- 1997 『想像の共同体』白石隆他訳、NTT出版。(Anderson, B. 1983 *Imagined Communities*. London; New York: Verso.)

小田 亮

- 2001 「越境から、境界の再領土化へ」『人類学的実践の再構築』杉島敬志編、世界思想社。

ゲルナー、アーネスト

- 2000 『民族とナショナリズム』加藤節他訳、岩波書店。(Gellner, E 1983 *Nations and Nationalism*. Oxford: Basil Blackwell.)

スミス、アントニー

- 1999 『ネーションとエスニシティ』巢山靖司他訳、名古屋大学出版。(Smith, A. 1986 *The Ethnic Origins of Nations*. Oxford: Blackwell.)

デリダ、ジャック

- 1972 『根源の彼方に：グラマトロジーについて』足立和造訳、現代思潮新社。

フッサール、エドムント

- 1979 『イデーン I 純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』渡辺二郎訳、みすず書房。

吉野 耕作

- 1997 『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会。

Armstrong, J.

- 1982 *Nations before Nationalism*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.

Breuilly, J.

- 1982 *Nationalism and the State*. Manchester: Manchester University Press.

Hobsbawm, E.

1983 *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge University Press.